

## 文学と社会における「近代」（モダン、モデルネ）に関する研究

A Study of Modernity in Literature and Society

総括研究員：石川 實

分担研究員：石川 實 植和田光晴 神崎ゆかり 木村英二 中村茂裕  
山元哲朗

この研究プロジェクト・グループは、標記の総合課題について昨年度の研究成果を受け、それぞれの分担課題についての研究をすすめた。月一回の定例研究会において、各分担研究員が、順次、それぞれの個別的テーマについての研究経過あるいはその成果を発表し、それについて全体で質疑応答と討論がなされた。以下に年間の研究成果のレジュメを列挙して中間報告とする（50音順）。

### 石川 實：シラーの「音楽的詩」の理論

記号学には構造主義的言語理論に発するラインと、カッシーラーの『象徴形式の哲学』よりランガーの『感情と形式』にいたるラインがあるが、我が国では前者が支配的で、後者は日陰におかれているという感が強い。そこで、カッシーラーからランガーへの発展にシラーの美学と詩学が大きな役を演じているのではないかという推測に立ち、ランガーからシラーを見直し、シラーの思想を記号論的視点から解明すると同時に、シラーの思想との関連においてランガーの理論の意義を明らかにし、フィーリングの記号論の再評価を試みた（1996.1.23.定例研究会で発表）

### 植和田 光晴：R. M. リルケ、「危機」から「転向」へ

『マルテの手記』完結（1910年）から『ドイノの悲歌』『オルフォイスへ寄せるソネット』の成立（1923）に至る期間中は、いわば引き延ばされた危機であった。この間、不毛の中にも間歇的に生産的な時期が交錯する。1914年はそのような生産的時期の一つである。同年の6月20日付けのルー・アンドレアス・サロメに宛てた手紙の中でその「奇妙な」成立が伝えられている『転向』と題された詩（初稿）は、この時期のリルケの「転向」を直接的に示すものとして注目される。そこで1918年の「完成稿」との比較検討によって、リルケの「転向期」の言語的状況の記述を試みた。（1995.9.24.定例研究会で発表）

### 神崎 ゆかり：アンブローズ・ビアスの短篇小説における「時間」認識

昨年度に引き続き、アンブローズ・ビアスの短篇小説の分析を通して、今年度は特にビアスの「時間」の認識に焦点をあてて考えた。リアリズム小説を徹底的に否定することか

ら出発したバイアスは、小説空間における「時間」の扱いにおいてもリアリズム小説と訣別している。すなわち、リアリズム小説では、時間は時計の文字盤の上を動く針のように進んでいき、すべての人に共通の客観的時間が扱われている。しかし、バイアスは、個人の内的時間というものを小説のなかに取り入れることを試みている。そこで、バイアスがこの内的時間をどの様に表現しているかを分析することを試みた。(1995.10.24. 定例研究会で発表)

### 木村 英二：「モダン」の概念をめぐって

本年度は、すでに5世紀に始まる「モデルネ」(モダン)の概念史とそれをめぐる論争を跡づける試みを始めた。それは、17世紀以降の、現代のモダン、ポストモダン論争にいたる議論の源泉を探るためであった。この分野での研究成果を挙げているFritz MartiniやHans Ulrich Gumbrechtの記述やH. Robert Jaußの新旧論争と18世紀末のシラーやシュレーゲルの論文に対する論考を参考にしながら、考察をすすめた。主な成果は以下の通りである。論文：「表現主義における『近代批判』——『文学的モデルネ』の捉え直しに向けて——」(大阪産業大学産研叢書3『二つの世紀転換期における文学と社会』、1995.9.30.発行、所収)。(1996.2.27. 定例研究会で発表)

### 中村 茂裕：ホフマンとモデルネ

「モデルネ」をめぐる議論における問題のひとつは、「二つの」モデルネという視点によるものである。すなわち産業。社会の近代化の動きのなかで、そのアンチテーゼとして「文学的・美的モデルネ」を対置し、これを分析するという問題意識であるが、今年度はこの脈絡において、ホフマンの文学作品がどのように定位されるのか、分析を加えた。(1995.7.25. 定例研究会で発表)

### 山元 哲朗：ヘルダーリンとモデルネ

ヘルダーリンの「祖国的文化論」は、初期のF・シュレーゲルの「発展的総合文芸」の構想と類似性を持つ。過去の古典的詩形を捨て、「祖国的形式」による近代固有の文学を求めて歌われるヘルダーリンの一連の讃歌は、異質の文化であるギリシア語との激しい相剋を経て、新しい命を与えられたドイツ語を媒体として、壮大な詩的世界を構築しようとする意欲的試みに他ならない。「近代の刻印としての芸術」への両者の姿勢を考察する。(1996.3.27. 定例研究会で発表)

なお、昨年度は二回にわたって、特別講師(学内)に講演を依頼して、研究上おおいに啓発された。ここに記して両氏に対する謝意を表します。

三橋 浩氏：19世紀における進化思想について。(1995.6.27 講演)

北野 雄士氏：マックス・ヴェーバーの職業倫理について(1995.11.28講演)